

# 平成 23 年度研究成果情報

課題名：DNA マーカーを用いたクルマエビ種苗放流効果の検討

## [背景・ねらい]

クルマエビは本県有明海の重要魚種の一つであるが、近年、資源の減少が著しい。このため、有明四県では平成 15 年から共同放流を実施し、有明海のクルマエビ資源の回復を目指している。このような中、より効果的な種苗放流へとつなげるために、DNA 親子判定技術を用いた漁獲回収結果を基に、現在の海域環境に即した放流技術（サイズ、時期及び手法）を開発する。

## [成果]

- (1) 平成 22 年度に放流サイズと時期、平成 23 年度に放流サイズと手法（潮流時間帯）について、佐賀県内での漁獲回収率を比較した（表 1）。平成 22 年度の回収率は、30mm よりも 50mm で高く、6 月と 8 月の差はほとんど無かった。平成 23 年度の回収率は、夜間に 30mm で放流した群が昼間に放流した群より高かった（図 1）。

表 1 佐賀県海域におけるクルマエビの放流状況

	(万尾)		
	50m	30mm	30mm(四県共同放流事業)
平成22年	138	100	137(8月)
平成23年	145	100(夜放流)	136(昼放流)

※平成22年の1群以外すべて6月放流

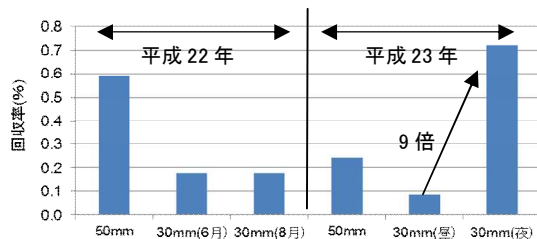


図 1 放流クルマエビの佐賀県内での漁獲回収率

- (2) 夜間に放流することで回収率が高くなることが示唆された。また、放流サイズについては 30 mm よりも 50 mm 種苗で回収率が高くなるものの、費用対効果の面からは、大型種苗（50 mm）の優位性はないものと考えられた。

## [成果の課題・問題点]

- ・ 30mm 以下の種苗について効果が不明である。
- ・ 昼間と夜間放流との相違の理由を再確認する必要がある。

## [今後の対応]

- ・ これまで標識装着が難しかった 30mm 以下の種苗についても、DNA マーカーを用いることにより追跡調査が可能となるため、小型種苗の放流効果について検討する。

## [その他]

研究期間：平成 21～23 年

研究担当者：資源研究担当 佃 政則